

「古田武彦記念古代史セミナー2024」がめざすもの

実行委員 大墨伸明

一. はじめに

- (1) 「古田武彦記念古代史セミナー」は、今年で7回目を迎えます。現在の形になる前には、古田先生が最新の研究成果を語る「古代史セミナー」が2004年に始まり11回開催されました。古田先生が「自由自在」にお話し、それを聞くのを中心とし、古田ファンの同窓会のような性格でした。先生が2015年にお亡くなりになった後、2018年から現在の標題で、新たに参加者の研究成果の発表を中心にして開催してきました。
- (2) 時間とともに、さまざまな状況が変わってきました。今では古田先生を知らない新たな古代史ファンの方々にも、参加していただくようになりました。そこで、この「古代史セミナー」はどのような趣旨で開催しているのか。二日間で、どんな発表があり、何を議論するのかを、ご案内させていただきたいと思います。また、後半では未来に向かってどのようなセミナーにしてゆくべきか、「めざすもの」を提案させていただきます。発表者の皆様ほか、会場の皆様も一緒に考えていただき、このセミナーの発展を期していきたいと考えます。

二. 今回のセミナーの進行について

- (1) この後、谷川清隆先生の基調講演及び五名の一般講演が始まります。
 - ① 基調講演 谷川清隆
 - ② 一般講演 新庄宗昭
 - ③ 阿部周一
 - ④ 大墨伸明
 - ⑤ 國枝 浩
 - ⑥ 黒澤正延
- (2) 明日の午後、講演終了後には、各講演者によるパネルディスカッションを予定しています。これは昨年来重視している企画です。発表者間の意見交換や会場からの質問を、時間の許す限りおこなっていきます。白熱した意見交換を通して、テーマの核心に迫る論点を明らかにすることをめざしています。今回はテーマを「倭国から日本国へ～東アジア外交の視点から」と掲げました。日本列島での倭国から日本国への移りかわりを「東アジア外交の視点」から検証するものとししました。
- (3) 「白村江の戦い」に敗れ、対唐・対朝鮮半島の外交路線は揺らぎ、続いて内乱「壬申の乱」が起きます。この激動の時代に『旧唐書』が記す「倭国から日本国へ」の変遷はいかなるものだったのか、様々な史料から実証的に考えていきたいと思

います。一般には、「倭国」が「日本国」へと国名変更したと理解され、その時期は天武朝とする説が有力視されています。『日本書紀』の記述の中から転換点を求める従来の方法です。しかし、様々な問題があります。『旧唐書』の別種は何を意味するのか。唐・新羅と戦い敗れた白村江の戦いはいかなる影響を及ぼしたのか。「日本国」の名称はいつ始まったのか。これらの解明につながるものと期待しています。

(4) 史料事実を重視して、客観的に簡明に論証する方法により、テーマに適う論点を掘下げていきたいと考えます。「日本」が登場する諸史料には以下のようなものがあります。

- ① 『旧唐書』倭国伝・日本国伝、『新唐書』日本伝の記録する二国の名称表記。
 - ② 『日本書紀』の伊吉連博徳書、日本世記、百済系三書など。
 - ③ 『三国史記』新羅本紀の文武王十年（670）の「倭国更号日本」記事
 - ④ 『善隣国宝記』「海外国記」の天智天皇十年（671）「日本国天皇」、天武天皇元年（672）年「倭王」、郭務悰の国書の二種の宛名。
 - ⑤ 『百済禰軍墓誌』の「于時日本余嚙拋扶桑以逋誅」の日本
- これらの「日本」をいかに理解するのか。その史料解釈を元にして、日本国の始まりが理解されます。史料の扱いにより、見えてくる歴史像もまた変わります。

(5) 古田先生は『旧唐書』の二国併記に着目し、701年の遣唐使派遣の決定、九州年号から大宝元年（701年）の転換年、700年の「郡・評」の転換点、これらから倭国から日本国への転換点を701年としました。先行した「九州王朝」が終焉し、「日本国」の支配に転換したのは701年であることを論じました。重要な指摘ですが、この転換点にどのような権力の興亡があったのか、その過渡期の実態の解明は十分とはいえません。「九州王朝説」を検証することでもあります。

三. セミナーのめざすもの

(1) このセミナーの「めざすもの」を考えるにあたり、更に俯瞰的に現状を見ておきたいと思います。古田先生が『「邪馬台国」はなかった』により登場して以来、多くの支持がよせられ、その後セミナーの共催団体も誕生しました。しかし、最近ではセミナー参加者の減少傾向は否めず、新たな参加者も限定的なものにとどまっています。戦後の古代史ブームもすでに過去のものとなり、教育界やマスコミにおける扱いも、隔世の感を禁じ得ません。

(2) こうした中、各地で協賛団体の活動、各研究者の地道な研究活動があります。しかし、拡がりを実現するまでには至っていません。どのように古代史への関心を喚起してゆくののか、古田先生の学問の方法にならい、論理の筋道がとおる古代の姿を明らかにしてゆくののか。その課題を以下、提案させていただき、参加されている皆さんとともに考えていきたい。

四. 古田先生の「学問の方法」

- (1)このセミナーは「古田武彦記念」とうたっています。依然として日本の古代史は、『日本書紀』に描かれた、ヤマトを中心とした権力であったという通念が支配的です。中国史書の描く「倭国」、金石文などにあらわれる史料事実がその通念により解釈され、必ずしも正当に評価されているとはいえません。古代の日本の姿をつかむには、史料の客観性を重視して、簡明な論理で説くという方法が現在においても求められています。古田先生を特に掲げるのはその研究方法にあります。
- (2)今年のパンフレットには、荻上紘一実行委員長のことば、「論理的、科学的、客観的に史実に迫ろう」と標題に掲げられています。学問を探究する上で、普遍的に認められる方法が謳われているものです。「古田武彦記念」とうたうのも、実は同じ主旨が述べられたものと私は理解しています。その普遍的方法を古代史研究においても貫き、実際大きな成果を上げたのが古田先生でした。このセミナーでもこれにならい、本来の学問の方法に従い、「史実」に迫ることをめざしています。
- (3)かつての「邪馬台国論争」を思い起こしてみたいと思います。五十年以上も前の話しになりますが、古田先生が衝撃的に登場した時のことを、御存知の方も多いかと思います。戦後の古代史ブームの中、活況をおびていた「邪馬台国論争」では「邪馬台国」の場所はどこかと、議論されていました。先生は『三国志』魏志倭人伝には「邪馬台（臺）国」ではなく、「邪馬壹国」とあることを示し、常識や地名に頼らず、原文の記述を重視して、到達する場所はどこかを問うたのです。そして、その里程・行路などを率直に読みとることにより、卑弥呼の国の所在地を博多湾岸とする画期的な古代史像を描き出しました。これが最初の著書『「邪馬台国」はなかった』です。
- (4)この発表は大きな衝撃を与えました。従来議論とは質を異にする説得力をもって受け止められたのです。それは先入観を排し、文献史料、考古史料などの客観的な事実を論理的に示し、誰でも納得するわかりやすい内容だったからでした。古田先生の登場は、たちまち古代史学会や一般の読者に知られるばかりか、多くの著名な文化人も賛意を表明し、時代の寵児となりました。その後、『宋書』『隋書』『旧唐書』などの中国史書が記録する「倭国」を、九州を中心にした「王朝」としました。この「九州王朝説」は多くの論点を提起し、それをめぐる議論はいまも続いています。日本の古代にあった歴史の事実、これを解明するうえで、古田先生の示した実証的で客観的な方法は重要であり、現在でも何ら色あせていません。

五. 課題その1 ——異論から学ぶ意義

- (1)これまで古田先生の学問の方法を紹介してきました。「古田先生の説こそ正しい」

と考える皆さんもおられることでしょう。先生の学説に共鳴し、信奉してセミナーに参加されている皆さんもいらっしゃいます。ここから「古田説の話を聞きたい」、「通説の先生の話は意味がない。」と考える皆さんもおられます。しかし、それでは拡がりを実現することはできません。異なる理解をする学者や古代史ファンの皆さんとの、学問的な交流を通して相互の理解を深め、議論の広がりを作ることはできません。異論から学ぶ意義があります。

(2)かつて1991年に信州白樺湖畔で、『邪馬台国徹底論争』と銘打って各界の著名な論者にも参加いただき、「古代史討論シンポジウム」が開催されました。古田先生とは「反対意見の持主」の学者も招くよう、古田先生自身が企画実現のために奔走されたと聞きます。先生もきっと、草葉の陰で困った顔をしているのではないのでしょうか。

(3)また、「九州王朝説」の立場に立つという議論はどうでしょう。「九州王朝説」の立場に立って歴史史料を解釈する方法です。その方法で「九州王朝説」が確かなものになったかのように説いても、「九州王朝説」に立っていない論者にとっては理解できないでしょう。これはあらかじめ「九州王朝説」にたつ内部の議論になってはいないのでしょうか。

六. 課題その2 —— 「古田説」の検証という視点

(1)よく知られるように、先生は「学閥」「学派」を否定していました。先にみたように、古田先生がこの「学問の方法」を説くのは、「邪馬台国論争」における東大閥、京大閥という「学閥集団」の存在を、いかにして打ち破るのかを、念頭においたものでした。この大きな壁に向って在野の研究者が、たった一人で相対するため、真実の探究は「論理のおもむくところ」という、論理的必然性を強調したのです。「学派」に従うということ、学問の方法として真正面から問うたのです。あらかじめ守るべき古田先生の学派があるかのように議論するのは、矛盾しているかのようです。

(2)学問の方法とその結果明らかにされた「学説」とは区別されるものです。「古田先生の学問の方法」を考えてきましたが、これは、いわば普遍的な方法です。それに対して、その結果、生まれる「学説」が説かれますが、それは真理とは限りません。現実の学説は「守る」ものではなく、新たな事実や探究により、次々とのりこえられてゆくべきものです。古田先生の学説も例外ではありません。常に新たな検証が求められているのです。いふなれば「古田説批判」です。

(3)この「批判」とは『「邪馬台国」はなかった』序章「わたしの方法」にあるものです。「けちをつける」というものではなく、「批判という言葉の真の意味」は「対象を「理性の目」の前にさらしつくすこと」としています。古田先生が明らかに

した倭国の歴史、「九州王朝説」ですが、正面から問うた、的確な批判もあります。批判に応える探究が求められているのではないのでしょうか。セミナーは広く主旨に沿う発表を求め、議論する場であり、異論を内包する場であることが、外部に向けた発信力のエネルギーになることを願っています。

七. 課題 その3 —— 広く一般に向けた発信力

- (1) 「古田説」内部の議論にとどまっていけないか、という面をみてきました。古田学説の周辺で議論する同好会的性格から脱皮し、外部と交流し発信できる質をめざしたいものです。内部向けの議論だけでは、広く一般の皆さんには関係ないと思われ、なかなか理解が進まず拡がりを実現することができません。いわゆる「通説」がはらむ問題を議論する俎上で、私たちの議論もなされるべきです。「卑弥呼」「倭の五王」「多利思比孤」ら、これらの中国との外交を展開した政治権力がいかなる実体であったのか、根拠もなく天皇とすることはどこに誤りがあるのか。広く学者の皆さん、一般の皆さんに説いて、理解を広げることがめざしたいものです。その道は容易ではありませんが、その方向なくして、道はありません。
- (2) 往々にして、自らを「九州王朝説の立場」「多元説の立場」に置き、通説論者は「近畿一元説の立場」とするような、「立場の違い」に還元する批判がなされることがあります。しかし、自身の「正しい立場」を前提として、相手に立場を変えよと迫るもので、到底理解し合うことはできません。そもそも、そのような「立場」の判定基準はあるのでしょうか。それは批判者の主観でしかなく、単なるレッテルではないのでしょうか。問題にすべきは「立場」ではなく、歴史の事実です。様々な歴史史料の解釈とその評価をめぐる内容の問題ではないのでしょうか。
- (3) 『失われた九州王朝』においては、それまでの論者の解釈の問題を論証し、その上で仮説としての「九州王朝」が論じられました。現在においても同じ論証が求められているのではないのでしょうか。

八. 課題 その4 —— わかりやすく説くこと

- (1) 研究の成果を皆さんにわかりやすく示すことが大切です。とはいえ、セミナーの持ち時間 30 分は短いです。過去、途中で終ることも少なくありませんでした。逆にこの限られた時間で何を理解してもらおうか、という発想も大切です。『「邪馬台国」はなかった』の序章では、「簡明率直な方法」「基礎的で確実な方法」と説き、「小・中学生に対してさえも、説得力をもち、ハッキリと理解されるもの」を意識したとあります。「ハッキリと理解される」ことが物質的な力となって人を動かし、大きな影響力を持つことになります。
- (2) わかりやすさとは何でしょうか。これも難しい問題です。当初の古田先生はまず、親鸞研究において高い評価を受けました。「文献処理上の重大な原則」に学び、史

料を実証的に客観的に扱い、親鸞の実像に関する新しい理解を示しました。「現代の常識」で過去の史料を解釈してはいないか、独自の視点で「当時の常識」を解き明かしました。そして、「邪馬壹国」の論証でも、現代の常識から軽々に誤りとするような史料解釈の問題点を示し、新解釈を述べています。わかりやすさとはなにか、何をどのように示したら理解していただけるか。常に意識していきたいものです。

- (3) 私たちは日本古代史の通説の問題を提起し、客観的な史料による真実の姿を明らかにすることを目指しています。そうした大きな課題を担ってゆくためには、協力が欠かせません。古代史上の諸問題に対して協働して研究し、築かれた信頼関係を基礎に、その成果が広く浸透してゆくことを願っています。

九. まとめ

- (1) 古田先生の「学問の方法」を今一度想起すること、四点の「課題」をあげました。
- (2) 私もかつて、古田先生の「学問の方法」に感銘を受けました。とある横浜市内の書店で、角川版文庫本の増刷された『「邪馬台国」はなかった』がうず高く平積みされており、その高さにびっくりして手に取ったのが最初でした。立ち読みし、しだいに夢中になり、買い求めると一気に読み切りました。その文庫本の奥付が1989年ですから、35年前になります。こうして、古田先生を知り、「邪馬台国論争」を知ることになりました。その本の序章にあるのが「わたしの方法」と題された研究方法でした。問題となるテーマは多岐にわたり、道はまだ遠いですが、努力が次の世代につなげてゆけば、何時か変化が起きるものと確信しています。